

《研究ノート》

鐘樓蝙蝠録

龜井 孝

こしめす

本誌の本年一月號(三九ノ一)の拙稿「捷解新語小考」においてこの語に觸れたさいには、實例をいちいち援用する勞をばふいた。そのことは、あそこで述べておいたとほりである(一ページ)。しかし、また、あそこでは書かなかつたけれども、圖説日本文化史大系(七)に收める「言語史上の室町時代」のうち、圖版三七八として掲げた「四河入海」の寫眞の解説で、「こしめす」の語の文證を加へておいた。そのさい、文證の一例としてそこに引いた林道春の春鑑抄にみえるところを寛永八年板に據つて示せば、下のごとくである。ちなみに、この寛永八年板は美濃半裁の横本であるが、春鑑抄には寛永六年にすでにこれとは板を異にする小本が出てゐる。しかし、本文には當面の問題に關して異同はない。

つきに、管見の範圍で「こしめす」の例をさらに二つえらんで書きとめておかう。その一つは、下總の安國山總寧寺十九世大淵(寛永十三年寂)の大淵代抄(六ノ七ウ)にみえるもの。

ガタトハハス血ライダシテヒトツ
コシメセトスニイヤナニガ我ハ
クダガル、処デハナヒ。ニツツナタ
ニヒレヨトスヤウナ心ヲ符録
之心トスツガヤウニモノゴトニシ
シヤクノ心ノアル礼ノハシデヤ
ルツツレハタトヘテヨアラシ。諸事
ニツキテ加採ニ心得テ人ヲサキ
ダテケレラ後ニスル礼ト云ツ
ムカシ虞ト莠トノ兩國ノ君ガ
カカヒメノ田地ヲアラソヒテツ
イニ次セヌホドニ。文王ハ聖人

すなはち、「寒夜客來茶當酒、竹爐湯沸火初紅」に注して、いはく。

是レハ寒夜ヲ題シタ句ダ。舊友ナドカ寒夜ヲ凌イテ訪タ郎ニハ誠ニ皮肉ヲソイデモ惜クハ有ルマイガ、貧家ナホドニ何ンニモ有テコソ。常ハ寒床ニシテ火ヲモ吹き起ネトモ、竹ノ枯レ葉杯ヲカキクヘテ初メテ吹き起テ、澁茶ナドヲ起テ出シテ、「是ヲ酒ト思テコシメセ。タトイ雲脚ナリトモ此志シニ酔シメデハ。」(句讀符ならびに引用符、いま私に加ふ。)

ついでながら、こゝに「茶」とあるは、もとより、このばあひ、こんにちの抹茶のたぐひである。「澁茶ナドヲ起テ出シテ」とあるを以てしてだけで、それは、うかがひうる。たゞし、参考までに「雲脚」の語の原義を説明しておく。これは、慣用としては、一般に粗悪な茶を指すに用ゐられたらしいが、下學集の左の記事では、それが碾茶でなければ、いひかへれば葉茶であつてはやはり、意味をなさない。

雲脚(ウンキヤク) 惡茶ノ名ナリ。言ハ茶ノ泡早ク滅ヘ浮ベル雲ノ脚ノ早クスギ去ルガ如シ。(卷下 飲食門 元和三年板を用ゐて、書き下し文とす。漢字のふりがな、もとのまゝ。)

第二に指摘しておきたいとおもふのは、「御伽草子」のうちの一篇「しゆてん童子」に「こしめす」の例のみえることである。それは、大江山の山中にて頼光たちが三人の翁(じつは、住吉、八幡、熊野の三社の神)に邂逅し、翁たちに酒をすゝめる條で、すなはち、つぎのごとし。

さらば疲れを休めんと、笈どもをおろし置き、さゝへの酒をとり出だし、三人の人々に御酒こしめせとてまゐらせける。(原刊本、丁付なし。引用、いま、漢字かなまじりになほせり。)

ちなみに、坊間流布の鉛印活版の本に「御酒きこしめせ」とあるならば、それは複製のさいのさかしらによるものである。さて、鐘樓に蝙蝠をやどす、きょうがつたるものかなとの譏笑をうけるかもしれないが、「こしめす」の語をこゝろえてゐれば、つぎのかすり秀句は容易にわかるであらう。

黄菊紫蘭咲きみだれたる前裁あると聞いて、すきの人びと集まりければ、宿の主とりはやし、あたゝめ酒を二色、爛鍋につき、右と左にもち出で、なにとおの／＼はふる酒をこしゆめすか、また濁酒を進じゆまゐらせうかと。(廣本・醒睡笑 卷八)

ちなみに、室町時代には、「新酒」に「シンシュ」^一「シンジュ」^二の兩形がある。「ふる酒をこしゆめす」に説明を加へる、やばは、もとより、さけておく。

たまご

「たまご」については、「捷解新語小考」において、すでにいろいろと述べておいた。しかし、それでも、「かひご」の方が雅馴なことは、いひかへれば文語的なものであつたらうといふ點については、もつと材料を擧げておいた方がよかつたかもしれない。そこで、まづ、その點から書きはじめ。

第一に、日葡辭書についてであるが、さきには、文證の援引にあつて、じつは、「たまご」の方に重點を置いた。しかし、あそこで擧げた以外にもかの辭書のうちに「かひご」が見えないわけではなく、つぎに引くがごとくケイラン(鵝卵)の項の説明には「かひご」の方が用ゐられてゐるのである。いま、日葡辭書のくみたてを分析して述べるいとまはないが、とにかく、このばあひに「たまご」でなく「かひご」の現れることは、やはり、ゆるなしとしないと考へられる。

Geiran. Ninatorino caigo. Ovos de galinha.

ちなみに、當時、卵から作つた一種の菓子があつて、それをケイランとよんでゐたことのあるについては、みぎの辭書の説明の引用を省いた。この菓子の製法のあらましは、これも、さきに「捷解新語小考」において利用した「料理物語」のうちに見える。

第二に指摘しておくべきは、ジョアウン・ロドリゲス(João Rodrigues)の長崎版日本文典に「たまご」と「かひご」との雙方がみえてゐること、ただし、その現れる文脈にはおのづからなる相違の認められることである。すなはち、「かひご」の方は、Raiso. (卵生)を日本語で敷衍した個所にみえ、「たまご」の方は、日本語の數詞の説明の用例に「蜜柑三つ」「梨五つ」などとならへて「tamago mita」などと擧がしてゐるのである(詳細は、讀本の索引にて檢索されし)。

つぎに、「捷解新語」に關する語彙の考證には直接かゝはるることがでないが、「たまご」については、もひとつ、書きくは

へておきたいことがある。それは、「日葡辭書」の記すところに據るかぎり、すくなくとも、いはゆるシモ、すなはち九州地方においては、卵に對してカイゴといふ形なく、蠶をあらはす語としてカイゴとカイゴの二形があつたらしいことについてである。すなはち、こゝにみられるところの卵に對するカイゴの形の消滅について、これは、かのジリエオン(Jules Gillieron)によつて創始された言語地理學による解釋をおそらくは適用して説きうる例と考へられるわけである。ただし、もし、ガスコーニエ(Gasconne)方言における猫と鶏との同音衝突がラテン語《gallus》の子孫の滅亡の因であるなら、蠶と卵とがともにカイゴであることは、その病理的現象たる點において、かの猫と鶏との衝突とあひ似たるものであらうから。ところで、ここまでは、日葡辭書を材料としての解釋であるが、蠶と卵との同音衝突は、かならずしも、九州方言における現象とのみ解すべきものではなさうである。それといふのは、「新刊多識篇」(「多識篇」に林道春が和訓をまんじようがなにて加へたるもの)には、蠶をカイゴとする例が卷五「蠶絲門」にいくつもみえるからである。くはしくいふと、十三例のうち十二例までが「加伊古」とあつて、その「古」に濁點が施されてゐるのである。もつとも、同書卷四「蟲部」にも「かひご」の語は、いくつもみえて、ここに現れる「加伊古」の古字には、すべて濁點がないのであるが、この前後のところには、おしなべて濁點が用ゐられてゐないので、この方の文字が「カイゴ」をあらはしてゐるのか、「カイゴ」を單にさう書いてゐるのか、これだけで

は、なんともいへない。しかしながら、「カイゴ」の形の存在は、巻五の諸例をもつて、所詮、うたがひない。

他方、同書巻四「禽部第七」には、三例「タマゴ」がみえ（一例は、「多末古」とあつて、古字に片かなでゴとかなづけあり、二例は「多末古」の古字にたゞちに濁點を加ふ）、「カイゴ」の形はみえない。

ちなみに、「新刊多識篇」については底本のことに一言しておくに、これには古活字板の板本の存在が知られてゐるが、わたしは未見である。いまここに使用せるは、巻尾に「二條通玉屋町 上村次郎右衛門新刊」とある無刊年の整板の板本である。これは、その板式からみて、いはゆるかぶせぼりの方法で古活字板を覆刻したものかとおもはれる。しかし、片かなの附訓はもとよりのこと、漢字に直接施されてゐる濁點も、古活字板の方には、おそらく存しないものであらう。つまり、濁點は、整板刊行のさいに加へられたものと考へられる。なほ、上村板の發行は、かりに寛永年間をくだるとしても、寛永をへだたることいくばくもないころのものとみてあやまりないであらう。

「みちがゆく」

「日葡辭書」にシモとの注記を加へて登載された語は相當の量にのぼり、これらに對して他の文献から一々に旁證を示すことはほとんど不可能なしごととおもはれる。このことは、とりもなほさず、全體としていへば、それらがシモのことばであることの消極的な證明となるかと考へられる。しかし、われわ

れは、あまり無條件にこの注記をうけいれない方がいゝ。さういふことを、わたしは、さきに述べた（「捷解新語小考」「餘説」）。そのさいには擧げなかつたけれども、日葡辭書の記事を無條件にはうけいれない方がいゝとおもはれるいひかたを、さらになつ、やはり、ここに書きつけておかうとおもふ。それは「ミチガユク」といふ形であるが、これを、日葡辭書に從つて、「ハカガユク」と排他的に對立するシモ特有の方言と考へてゐるむきもあるからである。まづ、念のため、日葡辭書の記事を掲げる。

Michiga yucu, 1, mairu. *Ir a obra por diante. No Camise diz, Facaga yucu. (《Michi》の項より)*

(ミチガユクあるいはマイル。しごとがさきへすむ。「上」にては、ハカガユクといふ。)

Fac. Vt, Facagayucu, 1, mairu. *Ir a obra avante, ou luzer. No Ximo se diz. Michiga mairu.*

(ハカ。例、ハカガユクあるいはマイル。しごとがさきへすむ、展開する。「下」にては、ミチガマイルといふ。)

日葡辭書が資料として珍重すべき多くの記事をふくみ、かつ、その記載が一般的にはきはめて信憑に値すべきものであること、これはたれしもの認めるところであるが、しかし、辭書編纂者の規範意識には、ときに、ゆきすぎが、——つまり、わるくすると、ゆきすぎからするあやまりが、——あるのではないかと考へられる。「ミチガユク」のごときは、みぎの記事だけを見れば、まことに明快であるが、つぎに引く「御伽草子」の

「さいき」の用例は、日葡辭書の記事をそのまゝうけいれることに多かれ少かれ逡巡を感じしめるであらう。

豊前の國うだのさいきと申す人、一族に所領をとられ、京都へ上り沙汰するといへども、さらにみちゆかずして、年月をおくれどもかひなし。

佐伯の本領もほどなくみちゆきて、豊前へくだらんとぞの給ひて、こしらへられけり。

ちなみに、「さいき」の主人公は豊前の人間であり、はなしの舞臺も後半は九州にうつるけれども、しかし、この種の作品の性質にかんがみて、そのくらゐのことで九州方言が作品のなかにあらはれるとおもはれない。いな、「さいき」の作者は、九州について、かなり無知の間人ではなかつたかとおもはれる。それは、主人公が筑紫へくだつてのち、京にのこされた女房がたま／＼鎌倉へくだる僧のあるをさいはひにそれに文をこつづけるくだりがあるからである。もつとも、「さいき」の本文(テキスト)の歴史については、わたしは、なにも知つてゐない。

音便

さきに、わたしは、一橋大學研究年報の社會學研究Ⅰに「音便名義考」と題する考證を寄せた。もとより、いろいろ不満足な點があるが、いま、それをそれとしてそのまゝ告白してもせぬないわざであるから、それはさしひかへる。たゞ、「音曲玉淵集」(三浦庚安著)にみえる「音便」の用例を——わたしの主觀的なきもちに即していへば、うつかり——洩らしてしまつ

て、しかも、このごろのやうに、すぐにひとが指摘しがちな世では、いつまでもそれを見送つてゐることは、なか／＼、はらふくるゝこゝちもせらるゝまゝに、鐘樓の蝙蝠ならずんば帽中の蜂、ままよ、ぶめくならぶめけよとばかり、追補の筆を揮ふことを、やはり、ゆるしてもらはう。

音曲玉淵集は、すぐれた謠曲の指南書として享保十二年に初板を出してのち、すでに江戸時代において板を重ねたばかりでなく、明治になつてのちも、こんにち四十代以上の人ならおそらく知らぬ人なき、かの「汽笛一聲新橋を」ではじまる鐵道唱歌の作者、大和田建樹による活版の複刻もあつて、かつては、一部には、よく知られてゐた書であるが、その第一巻は、その冒頭に「開合音便卷」なる小書をもつてゐる。當然、「音便」の語は、少からず、散見する。まづ、一二、用例を書きぬいて示す。

謠曲はもと長哥にふしはかせ(節博士)の付たる物なれば是を詠せんには極めて開合の明らかに音便のうるはしからんに……(享保板 一ノ一)

(上略)築地如此傍ニ字ヲ付るハいノかなヨリチノ字にうつればじノかなニ成安キ故に舌を齧へ當慥にぢのかなに聞ゆるやうにはぬる心に唱ふへきとのをしへ成を直についんぢトヨムもイカ、これ皆音便を不得心故歟(十五オ)

みぎのほか、十三オ、十五ウ、十六オ、二十二オ、二十四オ、二十四ウ、二十五オ、三十四オ、四十四オにも、それ／＼、一つまたはそれ以上の用例がみえる(たゞし、丁数は、すべて、

享保板による)。なほ、「音便の連聲」といふいひ方もみえてゐる。すなはち、

一音便の連聲の事 唱へやう筆には記かたし 可受口傳

百人一首 三人一所 三思一心 陽成院 冷泉院 せめて

今はまた 下馬はわたり 露もたは(十三才)

さて、さきに「音便名義考」においては、契沖よりのち、はじめて、かなづかひの書に「音便」の語がみえるやうになつたむねを説き、それに對する實例として、服部蘭笑の假名遣問答抄を引いておいたが、年代のうへからいふと、これより、——かなづかひ書ではないが——、音曲玉淵集の方がふるい。このやうな、謡曲の方面においては、契沖を介さずに、聲明から直接「音便」の語がうけいれたかもしれない。ただし、契沖と同時代、またはそれ以前にさかのぼる「謠祕傳抄」のたぐひの書には、「音便」の語は、みえないやうである。こんにちの「音便」の語がその系譜を契沖の「和字正濫抄」にさかのぼるものであらうとみるわたしの推定は、やはり、決して、あやまつてはゐないとおもふ。たゞ、「和字正濫抄」を通じてのみ、「音便」の語がその流布をみるに至つたかどうか、それは、不明である。誤解のないやう、念のためにあらためていつておくならば、さきに「音便名義考」で述べたのは、かなづかひ書のうちに音便の術語が現れるやうになつたのは、おそらく、契沖からであらうといふ點である。

自然

「捷解新語小考」の稿を成すにあつたては、あいにく、いまだ公刊されてゐなかつたので、利用できなかつたが、そのご、捷解新語の索引(本文・解題とも)が世に送られたので、わたしは、雜誌「國語學」第三十一輯において、これを紹介しておいた。そこで、わたしは、この、世を益するところ多き、すぐれた勞作が、なほ未解決のまゝにとゞめた一條に對し、索引の價値をいつそう全からしめたいとの念から、利用者の利便をおもんばかつて、私見を述べておいた。もいちど、こゝに、その一條をかきうつして示すならば、それは、第九卷五丁ウの「しせんこう申おりもんちにおほしめすかたも御さるうかと」とある個所である。あそこでこの條を問題にしたのは、「りもんち」の形のためであつたこと、それは、あの拙文につけばあきらかなところであるが、ついでもつて、わたしは、「しせん」の方へも、一言、筆を及ぼした。こまかな注をほどこさうとおもへば、もとより、「りもんち」についても、これをめぐつて、いろいろ書くことはあるが、本稿のごときやゝ氣輕な雜記のたぐひなどでふかくこれに觸れるならば、むしろこころならずも、げて趣味に墮するおそれが多い。それをあへてしてまでむ書きたいとおもふことがらがあるといふほどのことではないし、また、拙文を客觀的にながめてみて、もし、なにを補ふべきかとみれば、それは「しせん」の方についてであらうとおもはれるので、前口上が、少々、饒舌に流れたが、つきに、これについて、「捷解新語」とはゞ時代をひとしくする文獻から、用例を二つ掲げておく。まづ、コリアド(Collado)の「懺悔録」

(一六三二年ローヤ刊)から。

.....xijen mi mōchi ni natte, gushun o [sic] txi na
nō to mutguaxū zōjite.....(p. 38 f.)

(自然身持になつて、外聞を失はうとむつかしう存じて……)

〔みちの對譯ラテン文〕 *quia tamen timui ne……si forte*
grauida efficerer honorē ammitterē……(p. 39 f.)

みぎの「懺悔録」の文章は、精確な慣用的表現としては、「自然身持になつて外聞を失はうかと」とあるべきものと考へられる。この「自然」が對譯ラテン文の《(si) forte》にあたることは、いふまでもない。すなはち、別の日本語をもつてすれば、「たまたま」で置きかへて、よく意味がとほる。しかし、つぎの「御伽草子」の例にみるやうな「自然」をたんに「たまたま」(=《forte》)でいひかへるならば、ここでは、原文の意味がずれてしまふ。

自然舟なくてはいかゞあるべきとて、また、うばに御器と箸とをたべと申しうけ……(一寸法師)

こゝにこの「自然」といふことばで志向されるところは、舟がない状態(又ハ、状況)であつては都合がわるい(にちがひない)といふ、主體に對立する外界の客觀的事實の聯關である。ところが、このやうな状態(又は、状況)が、主體の關心の對象であるにさきだつて、主體の意志を超越したおのづからとしての自然なのである。さて、みぎにあげた數例(「捷解新語」その他の)にみられる慣用的な表現としての「自然」に對し、世間ふつうにおこなはれるいひかへおきかへの注釋のたち

ばにならつて、まづ、もつとも恰好な別のことばを求めると、それは、「もし」である。しかし、この《「自然」=「もし」》は、たんなる、注釋のうへに應用できる公式ではなく、じつは、ことばとしての「自然」と「もし」とが、すくなくとも、日本語の歴史のある時期において完全な同義語であつた可能性を教へるものである。もとより、くはしくは、「自然」が「もし」の同義語としてつかはれるやうになつてくる過程をまづ明らかにすればならないが、いまは簡単に結果から論理をくみためていへば、「もし」のあらはす意味に變化が起つたといふよりは、「自然」が「もし」のあらはす意味にあづかるやうになつた、いひかへれば、同じ意味をわかちあふやうになつたとみた方がいゝであらうかぎり、ことばとしての「自然」の方をてがりに、そこから、日本人の意識のそこにひそむ「もし」の意味の構造へさかのぼつてゆくといふこゝろも可能であらう。さういふ風に考へて、かつておこなはれた「自然」といふことばの慣用に、わたくしは興味を感じてゐる。古代の日本人は、主體の(意志の)そこにある客觀的自然を、人間や文化や神の恩體に對立する存在として實體化することなしに——すなはちそのやうに *hypostatise* することなしに——「萬一」「たまたま」(つまり、また「まれに」)といった相において副詞的に把握し、それを日本人本來のことばとしては「もし」の形には、結晶せしめてゐると解されるのである。つまり、精神的にみれば、日本人は、自然を必然として追窮せず、單に、現象としての自然そのものに全くの偶然(いひかへれば、*fortis*)を感じ、

そこからして「もし」に自然の根源を直観してみた、といふことも許されるのではなからうか。ただし、ここでは、「もし」そのものゝ意味構造の分析にまでには立ち入らない。

《Grammata Serica Recensa》

英語に堪能の士はすでに気づかれてゐることかとおもふが、たねをあかせば、「鐘樓ノ蝙蝠」は、「bats in the belfry」のバタのほびをぬいてみたまでである。書ききたつた諸項目、これすべて、いはゞ、わたしの鐘樓(ノ頭)にすくふ蝙蝠の一匹一匹が書かされたものである。そこで、ついでに、「もう一匹。ただし、この一匹、わたしの氣持としては、わたしのおのぼれが化したものではなく、出版にはなかなか高い金をくつてゐるであらう我が學園の英文紀要が、おたがひに畑のちがふ諸先生がたのおそらくは御存知ないであらうとおもはれるところで、いさゝかの寄與をしたかとおもはれることについて、語らうとするものである。

ちひ、《Grammata Serica Recensa, 1957》は、讀んで字の

ごとく、舊版《Grammata Serica, 1940》の改訂版である。この新版に接して、まづ、わたしは、碩學カールグレン(B. Karlgren)教授の老いてなほ倦むこと知らぬ努力にふかい尊敬の念を禁じえない。

紹介しない書評はいづれどこかであることとおもふから、その方は、その道の學者にゆだねることとするが、とにかく、舊版は、新版の面目を一新したものである。たとへば、中古音に四聲の施された點は、新版の特徴である。ところで、さういふ全體的な特徴についていふと、舊版には《Script and Phonetics in Chinese and Sino-Japanese》といふ副題がついてゐた。しかるに、日本漢字音に關することがらには、新版では、全然、ふれてゐない。これについては、舊版における日本漢字音の部分がじつはむだな努力であることをわたしの指摘したこと(一橋英文紀要五ノ一、一九五四 拙文参照)があづかつてゐるのではないかとおもふ。

(一橋大學教授)